

ブロイラー鶏舎環境改善の事例

奥山正孝・興侶典光・蓑毛良幸・遠目塚敏男 (宮崎県畜産試験場川南支場)

Masataka OKUYAMA, Norimitsu KOUROGI, Yoshiyuki MINOMO and Toshio TOMETSUKA : Improvement on Environment of Open Floor-Type Broiler House in Summer and Winter

1. 研究のねらい

本県中央部は古くから養鶏の盛んな地域で、ブロイラーをはじめレイヤー、種鶏等養鶏のすべての部門が密集しており、防疫の面で問題の多い地域である。当地域にA農協があるが、ブロイラー部門 (15戸, 52棟) では県内農協の中でも生産性の低い農協の一つとされていた。

しかしその後生産性の向上に努力し、かなりの成果を上げるようになったのでその経緯を報告する。

2. 研究の成果

A農協ブロイラー部門の生産性向上対策の立案と実施に当たっては、県経済連、関連農協、家畜保健衛生所、県畜産試験場等でプロジェクトチームを結成して対応した。プロジェクトチームではワクチンの効果、接種方法等の試験、県下各農協傘下組合員の施設器具類の設置状況等の実態調査、重点指導組合員を設定しての飼育管理技術の検討等々を行って次のような具体的施策を立てた。

重点指導組合員の春と夏2回の出荷成績と実態調査から検討して、夏と冬における温度管理が最も重要であることがわかったので、断熱材の装備率を70%から100%に向上させ、センサー付き大型換気扇 (直径1m, 4台/棟) の普及率を0%から70%、換気扇風量調整のためのインバーターの普及率も0%から50%に向上させた。

さらに自記温湿度計、放射熱防止用遮光ネット、保温用ビニールシート等の装備を0%から100%に向上させた。以上の処置によって、夏期においては、

①鶏舎南面と東西面に遮光ネットを張り放射熱を抑制し、かつ除草を励行して風通しを良くした。

②舎内温度と体感温度を考慮し、鶏の状態を観察しながら舎内に適温域ができるように換気扇と細霧装置を作動させた。

冬期にあっては、

③保温のために壁の内外にビニールを張った。

④換気は陰圧式換気扇を利用したが、保温をまず第一に考えた。

衛生対策は、

⑤マレック病ワクチンの雄のみ接種と雌雄接種の比較試験においてその差を明らかにすることはできなかったものの、各種疾病にかなり汚染されている現状を鑑みて、マレック病ワクチン接種を雌雄とも実施

することにした。

組合員の指導は農協が当たり、

⑥部会を組織的に編成しなおし、研修会等を頻繁に行い、部会の活動の活性化を図った。

その結果、A農協ブロイラ部会の出荷成績は、対策を立てた後では著しく向上した。また県下で最高位に属するC農協と、対策を実施した前後の出荷成績を比較すると対策を実施することによって指数値12~16の差が6~8減少した。またB農協 (A農協と同一地域に在る) はA農協程積極的な対応はしなかったので、その結果A農協との差 (対C農協の指数値) は4~5に広がってきた (第1表)。

3. 今後の研究発展の方向

この活動が成功したのは、関係機関で問題点の認識と意思の疎通がスムーズに行われ、各機関の連携がうまくいったこと、事業主体たる農協が問題点を十分認識し上から下まで一つの目標に向かって進み、組合員を常にリードしてきたということである。そのことにより、投資、改善した分は直ちにその見返りがあり、そのため組合員の農協に対する信頼感が著しく高まってきた。

この事例は今後の畜産技術の発展を図るうえに多くの示唆を与えるものと思われる。

第1表 プロダクションスコアにおける事業効果と農協間比較

農 協	1985	1986.4~10	1986.11~'88	1988.4~12
C	182.2 (100)	185.9 (100)	194.1 (100)	199.0 (100)
A	160.5 (88)	155.7 (84)	181.9 (94)	182.5 (92)
B	159.3 (87)	155.7 (84)	173.1 (89)	175.2 (88)

注) 1. 1986.4~10以前の数値は事業実施前の数値。

2. 1986.11~'88.3以降の数値は事業実施後の数値。

3. () はC農協を100とした指数。

4. プロダクションスコア = 出荷重量 ÷ 入雛羽数 × 10,000 ÷ (出荷日齢 × 飼料要求率)